

甲状腺外科草子 142 哲人宰相：大平正芳余話⑫

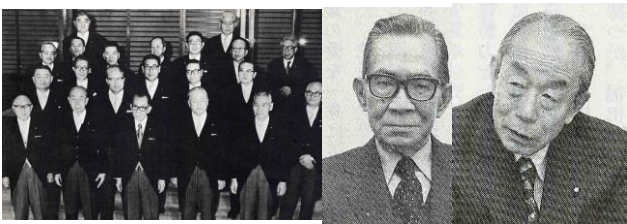
杉野 圭三

総理まであと一歩

1974年（昭和49年）12月の**田中金脈問題**で田中は総理辞任の決意を固めた、大平は総裁公選を主張したが、福田赳夫は大平との話し合いでの決着を持ちかけた。

一方、三木武夫は「今度は反主流派に政権を渡しはし」と主張、最終的に椎名副総裁の裁定で三木政権が誕生する。

その前夜、大平に電話がかかり、大平は「明日の裁定は三木のようなのだ。朝刊に載るらしい。なんだかんだと有象無象が寄ってたかって党を歪めている、オレはもう寝るよ」と吐き捨てるように言った。



三木内閣（1972年12月9日） 三木武夫 福田赳夫

三木と大平は同じ四国出身で、三木が党の近代化や「クリーン」を唱えながら裏でみんなと同じようなことをしているのが分かっており、その言行不一致に強い不信感を持っていた。大平は三木のことを「へらっこい奴（香川弁でこずるい、したたか）」と呼んでいた。

三木内閣でも大平は蔵相を務めたが、財政状態悪化により**財政危機宣言**を行った。しかし、三木は公選法改正案、政治資金規正法改正案に固執し、値上げ三法案（酒・たばこ・郵便値上げ法案）は廃案となり、赤字国債発行をせざるを得ない状況となった。

その後、1976年に**ロッキード事件**がおり、「三木おろし」が始まった。河野洋平らの「新自由クラブ」結成もこの年であった。

同年7月27日の田中前総理逮捕は自民党内の三木おろしを加速させるじたいとなった。

大平は自派の栗原祐幸に語った「今日は何とも言いようのない淋しい日だ。まさか田中君が外国から金をもらった容疑で逮捕されようとは夢にも考えていなかった。実は俺が池田内閣の官房長官の時、アメリカのCIAから選挙に必要な軍資金を提供するという申し出をうけたことがある。この時、金は欲しいと思ったが、外国の金は絶対に受けてはいけないと心に鞭打って断ったものだ。このことは田中君にも話し、彼もそうだと同調してくれた。それだけに、もし容疑が事実なら全く悲しいことだ。今にして思えば、もっと田中君に強く言っておけばよかったと悔やんでいる」

福田派は次期総理を目指し、大平派との話し合い

を行った。腹心の田中六助によると、「大平は承知したよと言うと、福田は喜んで『一年でもいい、一年半でもいい』と言った。私が『後は大平に頼む』と念を押し、福田さんも同意したのでそれをまた大蔵省の大平のもとに報告に行った」

同年10月、福田赳夫との会談がホテルパシフィックで行われた。いわゆる「**大福密約**」である。一回目は総選挙、党の立て直し、政権内分担、などの段取り。二回目に確認事項を文書にする話となった。大平は「文書にしてもしょうがないのじゃないか、二年後にまた改めてこのメンバーで話し合いをしたらいいのじゃないですか」と言ったが、福田は大平が必ず自分を支持するということを文書にしたいとこだわった。

そこで、福田内閣は一期二年という約束で文書が交わされた。

一 ポスト三木の新総裁及び首班指名候補者には大平正芳氏は福田赳夫氏を推挙する

一 総理総裁は不離一体のものとするが、福田赳夫氏は党務を主として大平正芳氏に委ねるものとする

一 昭和五十二年一月の定期党大会において党則を改め総裁の任期三年とあるのを二年に改めるものとする

右について福田、大平の両氏は相互信頼のもとに合意した。

保利茂が立会人で、福田赳夫、大平正芳、園田直、鈴木善幸が署名した。



保利茂



園田直



鈴木善幸

福田派の園田直は語る。

福田さんが総理を二年つとめて『それから先のことをどうするか』という話になった時、大平さんが初めて口を開いた。『二年後のことを今ここで話し合っても仕方ないんじゃないでしょうか。二年後のことは二年後にあらためて話し合うことにしようじゃありませんか』、下司なら『二年後に政権を大平に渡す、と文書にしる』と迫るところである。しかし、大平さんはその逆を行った。私は胸に迫るものがあつた」（追想編）

園田はその後、大平と接近し大平内閣では外相を務め、四十日抗争（1979年）では福田ではなく大平に投票し福田派を除名されることとなった。

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2025年6月26日